

# “An Outpost of Progress”における実存の構造

## The Structure of the Existence in “An Outpost of Progress”

後藤隆浩

### 1

Joseph Conrad の “An Outpost of Progress” (1898) は、Conrad研究における代表的問題作 “Heart of Darkness” (1902) と同様に、植民地アフリカを舞台とした短編作品である。この作品は、“Heart of Darkness” に先行する同系統の小品として位置付けることができるだろう<sup>1)</sup>。この作品の読解過程において、現代の意識的読者は、歴史認識的観点から、いくつかの主要な問題点を認識することが可能である。それらは具体的には例えば、「植民地経営」「文明化」「原始的自然の力」といった言葉によって指し示される。作品構造それ自身が、読者に西洋的視線の対象化、相対化を要請しているように思われる。

作品の舞台となるのは、ある交易所である。そこには二人の西洋人、主任カイエールと補佐カルリエが駐在している。交易所という閉ざされた空間において、二人の西洋人の精神は変容していき、最終的に悲劇的結末を迎えるのである。二人の人間の心的現象に着目してみるならば、実存的レベルにおける精神形態の変容過程が見えてくるであろう。本稿においては、二人の西洋人の実存的レベルを焦点として、作品構造を分析していくことにする。

この作品のテキストは、全知の視点の語りによって記述されている。小説の語りの技法としては、オーソドックスなものであるが、展開される物語内容の構造の提示という観点においては、極めて効果的な手法であると言えるだろう。テキストの語りは、物語内容における状況と心理の全体的重層構造を、解析的態度で徹底的に言語化して読者に提示していくのである。テキストの読解過程において読者の意識は、短編テキストという凝縮された言語構造体に反応して、テキストの基層における歴史的なテーマ性のレベルへと到達するであろう。このテキストは、現代の意識的な読者に対して、根源的なレベルからの問題を提起しているものと思われる。

テキストの始まりにおいてテキストの語りは、登場人物や建物の様子を説明し、閉ざされた空間としての交易所の状況を読者に提示する。そして多くの読者は、この交易所の初代所長であった男に関する暗示的な語りに着目するであろう。テキストは、次のように語る。

There was also another dwelling-place some distance away from the buildings. In it, under a tall cross much out of the perpendicular, slept the man who had seen the beginning of all this; who had planned and had watched the construction of this outpost of progress.<sup>2)</sup>

1) “Heart of Darkness” と “An Outpost of Progress” の作品世界の基調は異なっている。“Heart of Darkness” におけるクルツおよび語り手マーロウとは異なり “An Outpost of Progress” におけるカイエールとカルリエは、凡庸な人物として造形されている。作品世界の基調の差異は、両作品の語りの構造の差異によっても生成されていると言えよう。

2) Joseph Conrad, “An Outpost of Progress,” *Almayer's Folly and Tales of Unrest (Collected Edition of the Works of Joseph Conrad)*; London: J.M. Dent and Sons, 1947), p.87. 以下引用はすべてこの版により、本文の括弧内に頁数を示す。具体的箇所へ言及する場合も同様に本文の括弧内に頁数を示す。

“cross”という語が、象徴的、暗示的記号として読者の意識に強く作用するであろうことは、容易に理解されるだろう。この記号によって、テキストの内部に宗教的、文化的、精神的文脈が形成されるのである<sup>3)</sup>。実際のところ、ここは物語の最終場面における悲劇的結末の場所となっている。ある朝カルリエは、“cross”のひどい傾きをしっかりと立て直してくる。この行為自体が、はからずも後の悲劇的結末を確定させる物理的条件となるのである。カルリエの“I suspended myself with both hands to the cross-piece. Not a move.” (p.95)という言葉は、最終場面において読者の意識に反復されるだろう。熱病で命を落としたと伝えられる初代所長は、この交易所の始まりの当事者であり、設立過程の目撃者である。テキスト内において、すでに不在となっている人物の情報を与えられることにより、読者の意識は、始まりという現象に着目することになるだろう。物語内を流れる時間の始まりについて思考してみるならば、物語内容の基層に存在する西洋の視点という意識の成立を、起点として設定することが可能であろう。題名となっている“An Outpost of Progress”という記号は、西洋の視点と意識を土台として、テキスト内における意味を生成させるのである。テキストの語り主体を、語り手として擬人化しイメージ化してみるならば、西洋の視点と意識を保持した思考的語り手が像を結ぶことになるだろう。一つの仮説的考察であるが、このテキストの語り主体は、その視点と意識のレベルにおいて、テキスト化されていない初代所長の意識と認識を引き継いでいるように思われる。

テキストの初めの段階において、カイエールとカルリエの二人の西洋人の交易所への着任は、ほとんど何の意味も無いものであることが、読者に伝達される。交易会社の重役の言動により、二人の着任の無意味さは、状況的に酷薄なまでのレベルに達しているということが示されるのである。テキストは、交易会社の重役の人物像と二人に対する訓示の内容を次のように語る。

The director was a man ruthless and efficient, who at times, but very imperceptibly, indulged in grim humour. He made a speech to Kayerts and Carlier, pointing out to them the promising aspect of their station. The nearest trading-post was about three hundred miles away. It was an exceptional opportunity for them to distinguish themselves and to earn percentages on the trade. This appointment was a favour done to beginners. (pp. 87-88)

このような訓示という言語表現の表層に表出された重役の好意に対して、特にカイエールは心情的に強く反応し、涙ぐまばかりに感激して感謝の気持ちを表明するのである。しかしながら、河岸で蒸気船を見送るカイエールとカルリエを見て、デッキにいる重役は、そばにいる古参社員に次のように語りかける。

“Look at those two imbeciles. They must be mad at home to send me such specimens. I told those fellows to plant a vegetable garden, build new storehouses and fences, and construct a landing-stage. I bet nothing will be done! They won't know how to begin. I always thought the station on this river useless, and they just fit the station!” (p. 88)

訓示内容を完全に反転させた重役の本音の表出により、テキスト内におけるカイエールとカルリエの存在は、意味を消去されていくのである。蒸気船が再びこの交易所に来るのは、六か月後の予定である。かくして二人は、六か月間という時間枠において、森林に囲まれた交易所という閉鎖的の空

3) Conradの“Amy Foster”においても、作品内で十字架が印象深く表現されている。主人公ヤンコーは、船の難破により、全く言葉の通じない異国、英国の田舎町に打ち上げられる。彼は、女性のベルトにつけられている十字架を見て、自分が現在いる場所がキリスト教徒の国であることを理解する。

間に、物理的および精神的に隔離された状態となる。冷徹なまでの合理主義に基づいた重役の二人を軽視する態度は、結果的にこの交易所における悲劇的結末、二人の破滅の一因ともなるのである。六か月後の蒸気船の再訪が遅延し、カイエールとカルリエは、身体的および精神的に疲弊していく。

再訪の遅延の最終的な決定要因は、重役の心情構造にあったと言えよう。テキストの語りは、読者に次のような情報を伝達する。

Every evening they said, “To-morrow we shall see the steamer.” But one of the Company’s steamers had been wrecked, and the Director was busy with the other, relieving very distant and important stations on the main river. He thought that the useless station, and the useless men, could wait. ( p. 109 )

蒸気船の再訪の遅延は、時間的にカイエールとカルリエの耐乏生活の限界点を超えるものであった。やがて二人を破滅へと導く争いが発生するのである。テキスト内の情報から交易所は、複数存在するものと推測される。そしてそれらの交易所間においては、当然のことながら、成果の数値化に基づく競争が行なわれていたことであろう。テキストにおいては、全知の視点による語りによって、カイエールとカルリエの二人の孤立性や当時の交易会社の持つ過酷なまでの商業論理が、巧みに読者に提示されているのである。無価値であると判断された二人の交易所は、交易会社の活動のプログラムから完全に排除されている。実質的に自己の存在の意味を消去された二人の精神形態は、実存的危機の状態に到達し変容し始めるのである。

## 2

テキストにおいては、最初にカルリエの視線を通して、交易所が文明社会から隔離した閉ざされた空間であるという認識が示される。テキストは、重役の訓示を聞いているカルリエの様子を次のように語る。

Carlier, an ex-non-commissioned officer of cavalry in an army guaranteed from harm by several European Powers, was less impressed. If there were commissions to get, so much the better; and, trailing a sulky glance over the river, the forests, the impenetrable bush that seemed to cut off the station from the rest of the world, he muttered between his teeth, “We shall see, very soon.” ( p. 88 )

カルリエは、重役の言語表現上の好意的な訓示内容に対して、カイエールほどの感銘は受けなかったものの、文明化された西洋人としてこの未開地の交易所に着任したという意識を保持している。カルリエがヨーロッパにおいて所属していた軍隊は、文明社会における社会的制度、組織の具体例の一つである。文明化された西洋市民社会と現在交易所の周りを取り囲んでいる原始的自然との対照構造は、このテキストの物語内容における基本図式となっている。

自分たちの交易所への着任が本質的に無意味なものであり、重役からは何の期待もされていないという実情を知らないカイエールとカルリエは、自分たち自身をこの交易所において意味のある存在として位置付けるように行動を開始する。それと同時に彼らは、無意識のレベルにおいて、自分たちの絶対的な孤立状態を感知していたものと思われる。読者の眼には、地理的、精神的レベルにおいて閉ざされた空間であるところのこの交易所が、人間心理の変容過程に関する実験室に見えてくる。市民社会的関係性から完全に切り離されたとき、人間の精神は、自己というものを保ちうるのだろうか。市民社会的位置感覚を失った状況において、人間の精神はどのような変容過程をたどるのであるだろうか。このような問題点に関して、テキストに即して確認していくことにする。

重役の乗った蒸気船を見送ったあと、交易所に戻るまでの短い時間の経過において、カイエール

とカルリエの精神状態は急速に変容していく。テキストの語りは、この二人の心的変化を次のように的確に読者に伝える。

The two men watched the steamer round the bend, then, ascending arm in arm the slope of the bank, returned to the station. They had been in this vast and dark country only a very short time, and as yet always in the midst of other white men, under the eye and guidance of their superiors. And now, dull as they were to the subtle influences of surroundings, they felt themselves very much alone, when suddenly left unassisted to face the wilderness; a wilderness rendered more strange, more incomprehensible by the mysterious glimpses of the vigorous life it contained. ( pp. 88-89 )

読者は、二人が腕を組むという動作を行なっていることに留意する必要がある。これは、おそらく無意識のレベルにおいて発動した相互的な身体動作として解釈してよいだろう。今まで市民社会の制度の中に位置付けられていた自己が、原的存在として未開地に取り残されたのである。彼らを感じている孤独は、市民社会における関係性によって生成される相対的な孤独ではなく、精神の実存的レベルにおいて生成する絶対的な孤独であろう。未開地における原始的な自然は、市民社会の制度性に依拠して生きてきた人間の意識を、実存的レベルにおいて揺るがすだけの圧倒的な力を秘めているものと思われる。

彼らは、歩きながらさかんに会話をし続ける。テキストは、二人の様子を次のように語る。

Kayerts and Carlier walked arm in arm, drawing close to one another as children do in the dark; and they had the same, not altogether unpleasant, sense of danger which one half suspects to be imaginary. They chatted persistently in familiar tones. "Our station is prettily situated," said one. The other assented with enthusiasm, enlarging volubly on the beauties of the situation. ( pp. 89-90 )

腕を組み寄り添って歩いている二人の間には、過剰なまでの会話、言語活動が生成している。二人が共通感覚的に認識しているある種の危険意識が、活発な発話行為を誘発したものと思われる。会話内容の具体例としてテキストに示されているのは、交易所の美点、美しい景観である。交易所を取り囲む原始的な自然環境を、景観として分節化、秩序化することにより、二人は視る主体としての自己を定位させようとしているのであろう。二人が視る主体となることにより、交易所は、未開地における象徴的な意味での「前哨地点」となり得るのである。

初代所長の墓のそばを通りかかった際にカイエールとカルリエは、彼が日光に当たり熱病で命を落としたことを話題にする。二人の間に次のような会話が始まる。テキストの語りは、二人の心情的内面の説明を添えて、会話の様子を読者に伝達する。

Then they passed near the grave. "Poor devil!" said Kayerts. "He died of fever, didn't he?" muttered Carlier, stopping short. "Why," retorted Kayerts, with indignation, "I've been told that the fellow exposed himself recklessly to the sun. The climate here, everybody says, is not at all worse than at home, as long as you keep out of the sun. Do you hear that, Carlier? I am chief here, and my orders are that you should not expose yourself to the sun!" He assumed his superiority jocularly, but his meaning was serious. The idea that he would, perhaps, have to bury Carlier and remain alone, gave him an inward shiver. He felt suddenly that this Carlier was more precious to him here, in the centre of Africa, than a brother could be anywhere else. ( p. 90 )

初代所長は、この土地の気候への対処を誤り、命を落としたのであった。二人にとって異国における死は、最も忌避すべき事態であろう。カイエールはカルリエに対して、冗談半分の調子で日光に

当たらないよう命令を下すのであった。カイエールにとってカルリエの死は、想定され得る最も深刻な事態である。このようなカイエールの発言に対して、カルリエは次のように答える。

Carlier, entering into the spirit of the thing, made a military salute and answered in a brisk tone, “Your orders shall be attended to, chief!” Then he burst out laughing, slapped Kayerts on the back and shouted, “We shall let life run easily here! Just sit still and gather in the ivory those savages will bring. This country has its good points, after all!” They both laughed loudly while Carlier thought: That poor Kayerts; he is so fat and unhealthy. It would be awful if I had to bury him here. He is a man I respect. . . . Before they reached the verandah of their house they called one another “my dear fellow.” ( p. 90 )

カルリエもカイエールの命令を下す態度に調子を合わせて軍隊式に応答し、笑い出すのである。交易会社が定めた主任と補佐という役職を二人は、二人の間の職務上の関係性として言語化して表出させてみたのである。ここでの二人の会話の調子が示すところの友好的な関係性は、後に完全に崩壊して悲劇的な争いが生じることになる。主任と補佐という職務上の関係性を二人しか存在しない人間の間に階層的に規定したために、二人の間に生じた危機的状況は強化されてしまうのである。さらにカルリエは、自分たちの仕事の内容について、持ち込まれてくる象牙を集めておけばいいだけだと述べている。このような態度は、交易所における怠惰な雰囲気を生成することになるだろう。カルリエは内心において、カイエールと全く同じことを考えていた。カルリエにとっても想定上のカイエールの死は、極めて深刻な事態である。二人が共に健康な状態を保ちながら、この未開地に囲まれた交易所において生存し続けることが、二人それぞれにとっての生命線となっている。二人の関係性は、職務上の関係性をはるかに超えた、運命を共にする者同士という極めて親密な関係性へと変容していったのである。

カイエールとカルリエは、交易所での新しい生活を開始するにあたって、自分たちの住居の整備を試みる。しかしながら、その作業は、彼らの熱意にもかかわらず頓挫してしまう。その理由をテキストの語りは、次のように説明する。

To grapple effectually with even purely material problems requires more serenity of mind and more lofty courage than people generally imagine. No two beings could have been more unfitted for such a struggle. Society, not from any tenderness, but because of its strange needs, had taken care of those two men, forbidding them all independent thought, all initiative, all departure from routine; and forbidding it under pain of death. They could only live on condition of being machines. And now, released from the fostering care of men with pens behind the ears, or of men with gold lace on the sleeves, they were like those lifelong prisoners who, liberated after many years, do not know what use to make of their freedom. They did not know what use to make of their faculties, being both, through want of practice, incapable of independent thought. ( pp. 90-91 )

ここでテキストの語りは、カイエールとカルリエの二人が、自主的に仕事を確実に進めていくことは、能力的に無理であることを指摘している。二人は今日まで自分独自の考えを持つことなく、自発性も持たず、また決まりきった日常の仕事から逸脱することもなかった。彼らは言わば、機械のような受動的な生き方をしてきたのである。社会的制度が、二人の社会的生存を許容してきたのだと説明されている。読者はここでのテキストの語りの姿勢の中に、語りの主体が前提としているところの社会観といったものを読み取るであろう。ここで語られているのは、この作品が書かれた当時の語りの主体が持つところの社会的レベルにおける組織と個人の関係性のイメージである。さらにテキストの語りは、釈放された囚人のイメージを使って、市民社会から切り離された二人の現在

の状況を説明している。自由を自主的に使うことのできない二人は、自由であるがゆえの不自由という逆説的状況に陥っているのである。自由な環境に適応することのできない二人の心的現象を考察することにより、読者は物語内レベルにおける実存の構造を、明確に認識することが可能となるだろう。

### 3

交易所に着任した三人の西洋人たち、初代所長、カイエール、カルリエは、全員ヨーロッパ市民社会における、ある種の挫折者であったと言えよう。テキスト内で語られている情報によれば、初代所長は、故国での売れない画家として名声を追い求める困窮した生活に疲れ果て、この地にやってきた人物であった。(p.87) カイエールは、娘メリーの持参金を作るために、17年間幸せに勤務してきた電報局を退職した。しかしながら、その退職および交易所への着任は、本人にとって不本意な選択であったようで“*If it was not for my Melie, you wouldn't catch me here.*” (p.91) と不平を述べている。そしてカルリエも、次のように親族への不平を述べるのである。“*If I had had a decent brother-in-law,*” *Carlier would remark, “a fellow with a heart, I would not be here.”* (p. 91) 彼は軍隊退職後、怠惰と厚かましさのため親族の中で嫌われ者となり、義理の兄弟の超人的努力によって交易会社へ入社させられたのであった。(p.91) このようにカイエールとカルリエの二人は、それぞれの家庭の事情により、消極的、受動的な心情構造に基づいてこの交易所へ着任したのである。さらに重役がこの交易所を無用と思っていることも併せて考えてみるならば、テキスト内における交易所は、何ら積極的、肯定的な価値を持たない否定的場所の記号として意味作用を持ち始めるのである。

現在に対して否定的感情を持つカイエールとカルリエの意識は、故国での市民社会における過去の生活の回想へと向かう。カイエールは、次のように回想する。

*He regretted the streets, the pavements, the cafés, his friends of many years; all the things he used to see, day after day; all the thoughts suggested by familiar things—the thoughts effortless, monotonous, and soothing of a Government clerk; he regretted all the gossip, the small enmities, the mild venom, and the little jokes of Government offices.* ( p. 91 )

カルリエも次のように回想する。

*He, like Kayerts, regretted his old life. He regretted the clink of sabre and spurs on a fine afternoon, the barrack-room witticisms, the girls of garrison towns; but, besides, he had also a sense of grievance. He was evidently a much ill-used man. This made him moody, at times.* ( p. 92 )

テキスト上に表現されている二人の回想内容の要素を整理してみるならば、「場所」「人物」「思念」「言語活動」「人間関係」「音」などになるだろう。さらにカルリエは、自分の境遇に関する否定的感情にもとらわれている。テキスト上には表現されていないが、これらの要素以外にも過去の自己が経験したところの知覚、感覚、認識等が、現在の二人の意識に、しばしば回想イメージとして再現されてくるであろう。回想による過去における自己の位置の意味の確認は、現在の自己の否定的状況を強く認識させるものである。二人は現在、市民社会的諸要素の不在を意識しながら、閉鎖的空間において自己の存在意義を見失い、孤立的に存在しているのである。

このような状況において、カイエールとカルリエの関係性は、極度に濃密なものとなってくる。テキストの語りは、二人の心情構造を次のように説明する。

But the two men got on well together in the fellowship of their stupidity and laziness. Together they did nothing, absolutely nothing, and enjoyed the sense of idleness for which they were paid. And in time they came to feel something resembling affection for one another. ( p. 92 )

二人は、愚かで怠惰な似た者同士である。このことから相互に親近感を抱き、二人の間には、相互依存的な関係性が生成しているものと思われる。無為に過ごしながらか金をもらうことに喜びを感じるという感覚は、退廃的であり、物語内容の悲劇的結末を読者に予感させるものでもあるだろう。二人の間には、共犯関係の心情構造が形成されているものと思われる。そしてその心情構造は、限りなく比喩的な意味での関係性の病理、さらには社会病理の領域に近づいていると言ってよいだろう。その病理の原因は、二人だけで孤立的に存在していることである。ここで二人の関係性について、さらに抽象度を上げて考察してみよう。二人の精神形態の構造的類似性を考慮してみるならば、一つの仮説的解釈であるが、二人の関係性を、一種の分身関係と考えることも可能ではないかと思われる<sup>4)</sup>。このような観点においては、物語内容最終局面におけるカイエールとカルリエの争いを、テキストの深層レベルにおける分身同士の争い、分裂、関係性の壊れとして解釈する可能性が生成してくるのである。

交易所において怠惰に暮らしているカイエールとカルリエの様子を、テキストの語りは彼らの意識に即して次のように説明する。

They lived like blind men in a large room, aware only of what came in contact with them (and of that only imperfectly), but unable to see the general aspect of things. The river, the forest, all the great land throbbing with life, were like a great emptiness. Even the brilliant sunshine disclosed nothing intelligible. Things appeared and disappeared before their eyes in an unconnected and aimless kind of way. The river seemed to come from nowhere and flow nowhither. It flowed through a void. ( p. 92 )

この語りにおいて描かれているものは、二人の心象風景と考えてよいだろう。交易所の周りに広がる原始的自然環境、河、森林、大地は広大な空虚と感じられるのである<sup>5)</sup>。二人は精神的レベルにおいて、周囲の自然環境から完全に疎外されており、現在自分たちが存在している場所の世界像を、把握することができないのである。視界に入る光景を分節化して意味を与えることができず、事象の脈絡が生成されないのであろう。

さらにテキストは、二人の生活状況に関して、次のように語っている。

For days the two pioneers of trade and progress would look on their empty courtyard in the vibrating brilliance of vertical sunshine. Below the high bank, the silent river flowed on glittering and steady. On the sands in the middle of the stream, hippos and alligators sunned themselves side by side. And stretching away in all directions, surrounding the insignificant cleared spot of the trading post, immense forests, hiding fateful complications of fantastic life, lay in the eloquent silence of mute greatness. The two men understood nothing, cared for nothing but for the passage of days that separated them from the steamer's return. ( pp. 93-94 )

4) Conradの“The Secret Sharer”においては、船長の「私」と逃亡者レガットとの間の分身関係が描かれている。“An Outpost of Progress”においては、カイエールとカルリエの間の心情構造および行動様式同質性が、分身関係成立の可能性を生成していると言えよう。

5) 山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』(大修館書店、1984年)の「forest 森」の項においては、「管理、開墾のおよぼぬことから、理性や知性の外にあるものを表す」と説明されている。原著は、Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, Amsterdam・London: North-Holland Publishing Company, 1974.

この語りにおける描写を読むことによって、読者は交易所における日常的情景の雰囲気を実感的に理解することができるだろう。交易所の周りに広がる原始的自然は、静寂の世界である。そしてこの世界においては、市民社会における時間とは質的に異なる無時間的な時が流れているように感じられるだろう<sup>6)</sup>。蒸気船が再訪する予定日を意識した上での時間の流れは、あくまでもカイエールとカルリエの意識の中だけに生成する市民社会的時間の経過である。

初代所長の残した何冊かの小説は、カイエールとカルリエの意識に刺激を与える。二人は小説の読者として感情を活性化させるのである。テキストは、二人の様子を次のように語る。

Their predecessor had left some torn books. They took up these wrecks of novels, and, as they had never read anything of the kind before, they were surprised and amused. Then during long days there were interminable and silly discussions about plots and personages. In the centre of Africa they made acquaintance of Richelieu and of d'Artagnan, of Hawk's Eye and of Father Goriot, and of many other people. All these imaginary personages became subjects for gossip as if they had been living friends. They discounted their virtues, suspected their motives, decried their successes; were scandalized at their duplicity or were doubtful about their courage. The accounts of crimes filled them with indignation, while tender or pathetic passages moved them deeply. ( p. 94 )

なぜ二人はこれほど強く小説作品に反応したのであろうか。市民社会から切り離された状況において、二人は小説作品を読むことにより、疑似的に人間関係を追体験したと言えよう。現在の市民社会的人間関係の不在を、小説の作品世界に入り込むことによって、意識的あるいは無意識的に埋めているのである。小説作品に対する読者の反応としては、二人のそれは、稚拙なものであったかも知れない。しかしながら、現実と虚構との区別を忘れるほどに小説の作品世界に没入することにより、彼らは自己の実存における危機的状況の直視を、一時的にせよ回避することができたのではないかと思われる。後に二人の関係性の壊れが生ずるまで彼らの精神形態は、不安定な均衡の上でありながらも、延命されたのである。

以上カイエールとカルリエにおける心的現象を分析することにより、孤立的限界状況における人間の実存の諸相を考察してきた。さらにこの作品には、植民地経営という重要な問題が組み込まれている。この問題に関しては、継続課題として稿を改めて考えることにする。

---

6) 山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』(大修館書店、1984年)の「river 川」の項においては、「空間の移動は時間の移動でもあることから、川は時間を表す」と説明されている。